

劇といふ名を聞いて

長尾 豊

一
 兒童の劇殊に幼兒の劇演出を「劇」と呼ぶ時には、それ相當の心がまへがなくてはならぬ。何となれば今まで小學校幼稚園にほんたうの兒童劇が行はれなかつたのは、此の「劇」といふ一字に累されてゐたところが多かつたと思はれる。なるほど

兒童の劇も「劇」であり、又或人が言つたやうに、兒童畫と呼ばれる兒童の畫もならば、兒童詩と唱へられる兒童の詩もまた詩であるから、兒童劇といふ兒童の書いた劇、演ずる劇を同様に「劇」と言つても一向に差支ない。そこに何の障りがあらうといふ議論は一應道理らしく聞えるが、よく考へ

て見ると、理屈はさうでも事實は大いに違ふ。同じく畫と呼ばれても畫家の畫と兒童の畫とは違ひ、詩と唱へられても詩人の詩と兒童の詩とは違ふ。同じく劇と言つても、劇壇の劇と兒童の劇とは氷炭相容れぬものであるかも知れない。

兒童の藝術は従らに専門家の教養を注ぎこむこともなければ、又た單なる遊戲でもない。その生活の充足であるとか、缺けたるを補ふ情意の教育であるとか言はれてゐるが、併し、實際行はれてゐるところを見ると、多くは心身の圓滿な發達を遂げしむるものでなくて、或部分を至つて偏頗に伸長させる事と或り、その結果一時、兒童

を釣合の取れぬやうにすると、親しく童謡や児童畫を指導して來た人でさへひそかに告白するところである。

これは指導が知らず／＼児童畫を餘りに「畫」として、童謡詩を餘りに詩として、大人の詩として考へ過ぎるからではなからうか。児童の劇となると、一層此の感が深い。

二

近來一般に藝術に對する恩慕愛好の念が高められたとは言へ、繪畫や詩歌に對して社會全體が正しい理解をもつてゐるとは考へられない。特に劇に關してはなほ幾多の偏見臆斷を抱いてゐる人が多い。さういふ人達は教育家の中にも決して少なくはなからうと思ふ。假に劇を理解してゐる教育家があつたとしても、周囲の偏見臆斷を抱く人々に向ひ、児童の劇の何たるかを示して、その惑ひを解き、疑ひを明らかにしなければ、おそらく何

人をも首背させる事はかたいであらう。此の場合眞向正面から藝術論などを振翳してゆくはもとより、戯曲本能や情操陶冶を並べ立てたところで始まらない。ましてその教育家に眞の理解が缺け、劇に對する考が足りなかつたり、又は全然あやまつてゐたとしたらば、その人の劇の指導は、石を抱いて淵にのぞみ、薪を負つて火の中に飛込むやうなものである。

児童の劇についてもすでにいろ／＼論じられたが、要するにそれはいろ／＼論じられてゐるといふだけで、一遍通り眼を通し、適宜に切り盛りして並べて見たところで、何の役にも立たない。たとへば児童が棒を一本持てばそれが槍にもなれば鐵砲にもなり、時としては又魔法の杖にもなる、児童の想像を抑壓するなといふ事は、少なくとも理論の上だけでも児童の劇を扱ふ者の常識と成つてゐる。然るにその實演を見ると、児童の想像とは

全然没交渉な衣裳背景をもつて如何にも劇らしく見せようと努力してゐる痕が見える。理想と現實や議論と實際といふものはえて違ふものださうだが、これは又餘りに違ひすぎる。然らばどうして又そんなに實際が理論と背馳し、理論を無視するのと言へば、時に背景衣裳を飾つて、これを公表しても宜しからうといふぐらゐの、至つて淺薄な考から出發してゐるからである。つまり理論が、ほんたうに分つて居ない事になる。

一遍でも兒童の生活を諦視した事のある者ならば、この位のことは分らなければ成らぬ筈である。分つてゐてその通りに出來ず、又始めからさうしようとも考へないのは、まだほんたうに分つて居ない證據である。兒童の劇の理論を讀み、又その實際にたづさはつてゐたところで、眼前見易いのやうな事實が分らず、机上一片の理屈として直ちに押片づけてしまへるやうでは、情なくもあれ

ば又まことに歎かはしくもある。このやうな顯著な事實の見えない筈はないのであるが、眼を蔽つて見ようとしないと同じ結果に立到るのは、全く「劇」の一字に眩惑されてゐるからだと思ふ。

三

劇といふ名を聞いただけで早くも大袈裟なものと思ひ、幕を釣ると考へ、衣裳背景を欲しがり、唱歌ダンスを入れて、舞台照明もなければならぬと言ふのは、ほんたうの兒童の劇演出をまだ一遍も見た事のない人達である。其の人達の眼には劇場の舞台がチラつき、耳は観客からの拍手喝采に飢えてゐる。これは兒童の劇も「劇」であるといふ所から生じた誤解、それから起つた大きな間ちがひであると思ふ。

兒童の劇も「劇」である、否、劇でなければならぬといふ、劇らしく見せよう、見せる物化しようといふ卑しい努力を言ふのではなくて、兒童とい

とつである劇的なもの、活動的な假想的な、眞に劇的なものでなければならぬと言ふのである。それでなければ劇は兒童に取つて空しいひとひらの名に過ぎなう。

劇的でないものを強ひて劇らしく見せようとする所に、一切の無理が生ずる。そしてその一切の無理をもつて、本來劇的である兒童にのぞみ、兒童を縛つてこれを驅使しようとする。教育家が劇を解せずして演出に手を着けるのは、やがて兒童を酷遇し虐待する事になる。これにくらべれば劇らしいもの、脚本のやうなものを書いて、ひとり悦に入つてゐる方がどれ程罪が軽いかならぬ。

ほんたうに表現の満足がなく、演ずることの喜びが缺けてゐる時、兒童が華美は衣裳、立派な舞臺をもちたがり、見られる事を欲するのは決して兒童の罪ではない。その事はすでに兒童劇の議論で説かれてゐる筈である。屋上屋を架する兒童劇

の議論が不要としても、たとへその一斷片でも机上の空論でなくなるまで、讀返され、ほんたうに理解されないうちは、迂濶に看過しがたいものと思ふ。

~~~~~  
(一三頁よりつゞく)

作者に又は振付者に忠實であるといふ事は本當にその演出者として美しい態度だと思ひます。しかし必ずしも動作を寸分違はずに演出する事以外に忠實であり得ないと心配する必要はないと思ひます。

最も肝心なのは作者又は振付者の希求の本體を深く見詰めて、それに忠實である事でありませう。そして其の爲に時に動作に多少の變化を伴ふ事は許されるべきだと思ひます。